

モザイク通信

No.129 November 2023

発行：モザイク会議 議長 森敏美

モザイク会議事務局：〒185-0012 東京都国分寺市本町 4-12-4 司アートシティ 104

モザイク会議ホームページ：<https://maa-jp.com/> Email: maaj@maa-jp.com

編集／作成：モザイク会議運営委員会

2024 年のテーマ展会場が決まりました！

例年、あざみ野の展覧会の翌年に会員有志によるテーマ展を開いています。

来年は以下の会場で開催する事になりました。

多くの方のご参加をお待ちしております。

詳細は次号でお伝えする予定です。

2024 年 11 月 5 日(火)～10 日(日)、6 日間

アートコンプレックスセンター2F ACT5 (25 坪)

〒160-0015 東京都新宿区大京町 12-9 2F 03-3341-3253

会費の納入をお願いします！

2023 年度の会費(1 万 2 千円)の納入をお願いいたします！

振り込み先

ゆうちょ銀行口座記号：10000 番号：97185511 モザイクカイギ

他銀行からの振り込みの場合は以下になります。

ゆうちょ銀行店名：008（ゼロゼロハチ） 店番：008

普通預金口座：9718551 名義：モザイクカイギ

☆今年度会費の納入をしたかどうか？を確認したい方は以下のメールにてお問い合わせ下さい。

モザイク会議 E-mail: maaj@maa-jp.com

モザイク展 2023 報告

横浜市民ギャラリーあざみ野で9月6日～18日まで宮内淳吉個展とモザイク展が同時開催され、会期中、1000人を越える方々に御来場して頂きました。ユーチューブ(HPにも掲載あり)で展示をご覧頂けます。https://www.youtube.com/watch?v=K_dBJDgs_6M

受賞者は以下のように決まりました。

大賞	若月弓枝	「朝霧と稲穂」
二席	喜井豊治	「炎と花のパズル」
三席	平田恵利子	「ぶらぶら」
名古屋モザイク賞	戸祭玲子	「森は呼吸する」
モザイクタイルミュージアム賞	落合香木	「2月と共振」
佳作	左都	「hidden」

大賞: 若月弓枝 「朝霧と稲穂」



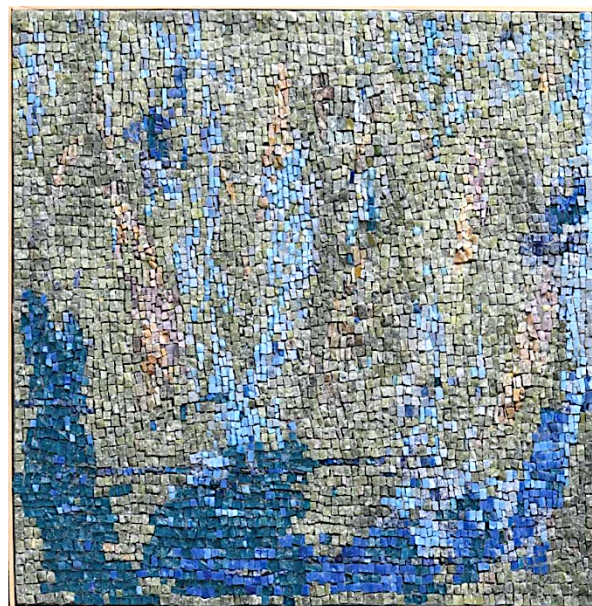
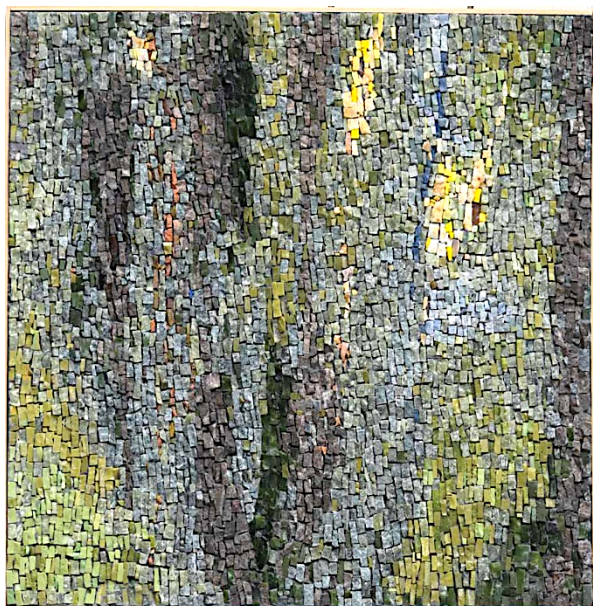
二席: 喜井豊治 「炎と花のパズル」



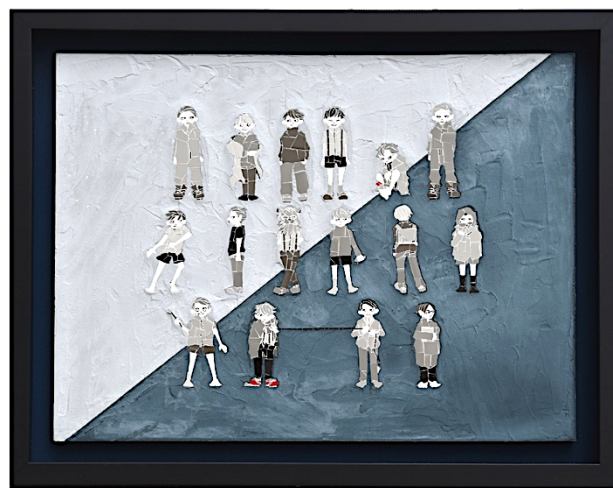
三席: 平田恵利子 「ぶらぶら」



名古屋モザイク賞: 戸祭玲子 「森は呼吸する」



モザイクタイルミュージアム賞: 落合香木 「2月と共振」



佳作: 左都 「hidden」



講評 「細片の積層と錯綜が織りなす魅惑と享楽」

藤井雅実

芸術哲学研究 1980 年代前半、東京で哲学者デリダの論文名を冠した「画廊パレルゴン」を主宰。 芸術～文化論の執筆・翻訳、講師などで活動。関連著書は(註)へ。

モザイク芸術は、太古から様々な文明で育まれ、建築装飾や宗教壁画などで高度に展開されました。しかし絵画や彫刻が、文化の中心分野をなす純粋芸術ジャンルとして自立した西洋ルネサンス以降、モザイクは、建築装飾などの実用に供する工芸の一種として、芸術史の表舞台からは隠れがちでした。

さらにしかし、そのルネサンス以来の西洋芸術という「大きな物語」も、モダンアートに至る様々な展開を経て、20世紀後半、その物語展開の極限域に達します。そこで、共に展開したモダンの人文系の思想などと共に、「大きな物語の終焉」が語られるポストモダンという段階に至った。そして80年代頃から、近代以前の様々な時代や西洋以外の文化の多様な芸術や工芸や、同時代のファッションやデザインからマンガやゲームなどのポップカルチャー、後のAI系に至るハイテク系アートまでが、次第にハイアートと錯綜するようになっていく。このモザイク会議の登場の背景にも、そうした文化状況の展開があります（註）。

他方、気候変動やコロナ禍などが示す地球環境の問題から、戦争や人種や性や人口問題など人間界の問題まで、＜物質的基盤＞の課題が切迫化してきている。

そうした物質的な次元がクローズアップされる背景とモザイク表現を絡めて眺め直してみると、この世界は、無数の＜物＞が錯綜して層をなす「物たちのモザイク」のように見えてきます。

モザイク芸術は、そんな「物たちのモザイク」である世界を、まさに「物の破片」を茂らせ工夫し祭る「茂祭工（モザイク）」であり、そのような表現と享楽へ人を駆り立てる「茂材駆（モザイク）」として、この物たちが切迫する現代に絡み合うでしょう。

大賞：若月弓枝さんの「朝露と稲穂」は、物の破片が錯綜し集積するモザイク芸術の特性を際立てた、その重厚な物質感の中、その重量感とは真逆の、「朝露と稲穂」の透明で軽やかなイメージを浮上させていた。少し横から見ると多彩な形と質感のテッセラの群れの輝きと共に重量感を湛え、しかしその細やかで多彩な輝きが、軽妙な光を煌めかせ、「物となった木漏れ日」のように輝きます。

二席：喜井豊治さんの「花のパズル」は、物質感より、小片が細やかに織り上げるパズルの戯れで、秘められた花の情景が紡がれる。その物の細片の綾織とそれが紡ぐイメージのレトリックとが、錯綜して語る秘文へと、観る者を誘います。そして四枚の画面の連なりと、花びらのような細片たちの軽やかな舞いはまた、花のパズルと共に物たちのパルス（脈動）が物の音楽を奏でていました。

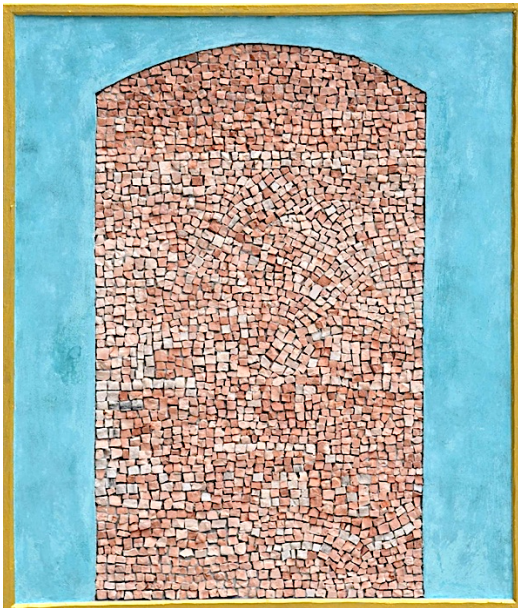
三席：平田恵利子さんの「ぶらぶら」は、ぶらつく人たちが洗練されたフォルムで描かれる。それがしかし、モザイクを紡ぐ硬い小片たちで、“ぶらぶら”とは対極の“ごつごつ”した質感で象られ、観る者は、そのフォルムの“ぶらぶら感”とマテリアルの“ごつごつ感”との共振で、日常的な“ぶらぶら／ごつごつ”の対立を超えた情景に、ぶらっと入り込んでごつと刺激されるでしょう。

佳作：左都さんの“hidden”は、ある側から見ると、ミニチュアの石庭の置き物のよう。しかしその裏側には、どこかの部族の村の洞窟小屋のような景色が隠されています。その洞窟小屋が、石庭側からはただの庭石となる。その石が置かれた地面は石組みで庭らしく、洞窟小屋側

は土の地面のように造形された立体モザイクが、文化の隠れた多様性という人間社会のモザイクも示すでしょうか。

名古屋モザイク賞：戸祭玲子さんの「森は呼吸する」は、テッセラの細やかな群れが、印象派絵画のような光の煌めきを醸し出す。しかし絵具の絵画にはない硬質な細片の、細かくとも／細かいからこそ観る者の小さな視線移動にも呼応する色と光の変化で、「森の呼吸」が視覚と触感の共同感覚で浮かび出る。ここでは、人間社会ではなく物のモザイクとしての自然界が捉え返されます。

モザイクタイルミュージアム賞：落合香木さんの「2月と共振」は、一見、モザイク感が薄いですが、子供たちの姿がその顔の細部の作りまで平らなテッセラで紡がれています。タイトルの謎めいた含みはモノクロームの色感と共に、2月という学年末の頃の、子供たちの心理の屈折と響き合いを暗示するが、同時にモザイクと絵画やイラストとの様式や技巧間の屈折と共振をも暗示するかのよう。

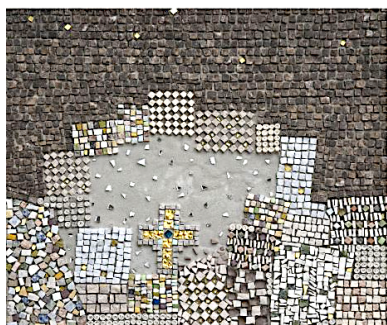


宮内淳吉 「窓」

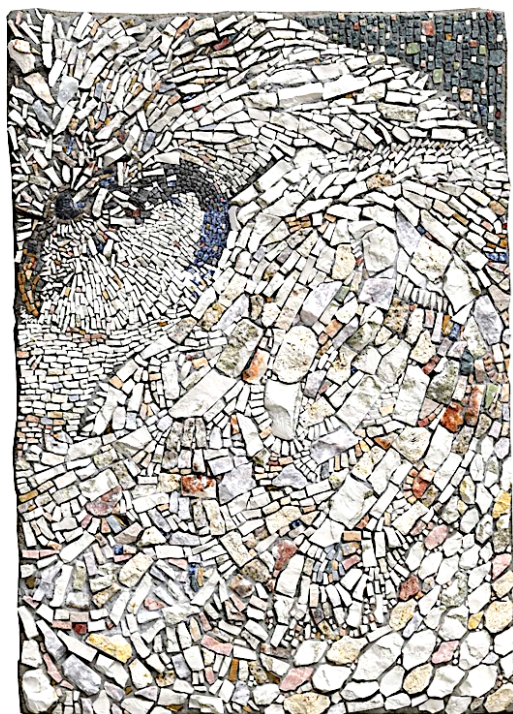
受賞作以外もどれも興味深い作品でした。いくつか挙げれば、宮内淳吉さんの「窓」は、窓の中に見えるはずの空と、ブロックで造られた窓枠が逆転し、空虚な窓枠の中に硬質な石材の構築体が見えるという、マグリットのなパラドクスが、マグリットの絵には無いモザイクの物質感の内に変奏される。森敏美さんが続けている”AMBIVALENCE”は、様々な廃物や破損した物たちも、モザイクの素材として活用し、コラージュやオブジェなどファインアートの様式を絡め、美的経験と社会課題という、表現の異なった層のアンビヴァランス（両価性）な錯綜を展開する。飯野夏実さんはドビュッシーのピアノ曲を表題に、印象派の音楽と絵画の筆触をテッセラの織物織り返し、異質なジャンルの共鳴を響かせる。



森敏美 「AMBIVALENCE2309」



飯野夏実 ドビュッシーのピアノ曲より「沈める寺」「喜びの島」「アナカプリの丘」



薄羽由実子 「烏骨鶏」

他方、薄羽由実子の「烏骨鶏」や菅原真咲さんの”summer songs”、福澤ヒロコさんの「可能性」、福原与恵さんの”garden”などは、モザイクの表現美を端的に示していました。

絵画よりもメディアの「物質感」が際立つモザイク芸術。その「物」の質感と共に惹起される情感や、その質感を伴って表されるイメージやメッセージや暗示作用…そうした表現に伴う、多様な層の重なりや絡み合いと、そこでのズレや異質性が導き開く魅惑の密林。上に挙げた作品たち以外にも、それぞれが、モザイクという、その物の細片の織物が育む、層構造と錯綜の魅惑を様々に示していました。

冒頭に記したように、大地や大気から動植物やウイルスまでの自然の物質界も、政治や経済から今世紀一瞬に世界を覆い尽したネット界まで含む人間界も、様々な不安

を増大させつつある今日。自然と社会のテッセラという「物の破片」を茂らせ祭る細工表現としての「茂祭工」



菅原真咲 「summer songs」

が絡みうる対象も、様式も、技巧も、限らない課題を秘めているでしょう。

モザイク表現は、「物の細片の組み合わせ」という制約があればこそ、その制約を逆手にとって、この世界の物質界から、イメージや言語を介した人間たちの関係性（間主観性・共同主観性）が織りなす言語や記号を介した象徴界までも、「物と意味のモザイク」として捉え返しうる。そうして、この世界のモザイクの不安を解きほぐしし、物や記号やイメージの未知の魅惑を探り織り上げる。その密林探査と享楽へ人を駆り立てる「茂材駆」として、待っているでしょう。



福澤ヒロコ 「可能性」



福原与恵 「garden」

(註)：ポストモダンに関しては、何でも相対化する相対主義、といった安直な単純化がよくあるので要注意。また、思想や批評方面では、ポストモダン期の思想が、物事や経験を支える社会的・文化的構造ばかりに着眼し、物事全てを人間と相関させ実在の実相を捉えそこなう相関主義だと評し、それに対し、物を照準する実在論を謳う傾向もある。が、その種の論にある面での妥当性や意義もあるが、相関主義 vs 実在論と単純化された二元論の信仰に陥っている場合もしばし

ばあるので、その点は要注意。ポストモダン期の、それぞれの時代や社会の構造から捉える観点も、人間も含む世界の基盤としての物質の次元を照準する観点も、背反するものではなく、共に、この世界の課題の把握に不可欠な次元として、錯綜した層構造（錯-層構造）を織り上げ、常に生成変化し続けている。

著者の関連テキスト

1：近代以降の芸術と文化の基盤の問題は、芸術と哲学を主題化した「〈外〉への共振－哲学と芸術の限界とその〈外〉」（電子ブック『Search&Destroy』第1号東京造形大学大学院）など。以下のアドレスでダウンロード可。 <http://cs-lab.zokei.ac.jp/labtu/%E9%9B%BB%E5%AD%90%E6%9B%B8%E7%B1%8Dsearch-destroy/>

1 b：「二種の四角片 Double Squares が誘う不穏と魅惑」（『現代の人事の最新課題 人的資本・健康経営・メタヴァース・リベラルアーツ』2022 所収

2：芸術の仕組みの話題に関連したテキストとして、「特異像（シンギュラル・イメージ）としての絵画――＜外＞の／への私的言語の享楽」『21世紀の画家、遺言の初期衝動 絵画検討会 2018』高田マル・編 <https://kaiga.myportfolio.com/1>

3：その背景にある芸術への挑戦など人間特有の高度な（動物から見れば変態的な）欲望から、人工知能の欲望実装の問題を論じた「AIは死の欲動を実装できるか？」『人工知能美学 芸術展 記録集』人工知能美学芸術研究会（AI 美芸研）編」

https://www.aibigeiken.com/store/aiaae_ac.html

その他、Wikipedia の藤井雅実の頁の著作欄などご覧ください。

藤原えりみ 講評

藤原えりみ

美術ジャーナリスト

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了(美学専攻)。

女子美術大学・東京藝術大学・國學院大学 非常勤講師。著書多数。

海外出張と日程が重なってしまい、講評会に出席できず申し訳ありませんでした。でも最終日に展覧会に滑り込み。作品を拝見しながら、6年前にモザイクに関する知識も鑑賞体験も乏しい状態で不安を抱きながら初めて講評させていただいたこと、イメージの描画よりもテッセラの材質や物質的特性を活かした作品に魅力を感じたことなど、当時の記憶が蘇ってきました。そして3回目を迎えた今回、素材をどのように扱い画面を構成するかを問う作品群が圧倒的に増えてきていることを実感いたしました。石だけでなく、ガラスや焼き物の破片、布などの素材や色合いの組み合わせも多様で、縦横斜めとさまざまな角度で配置していく細かい作業の積み重ねの痕跡をじっくりと拝見するのは目の喜びでした。モチーフの形態や色使いについても、これまで以上にシンプルでメリハリのある作品が多かったと思います。

例えば、宮内淳吉さんの「窓」。まず、テッセラを使わない水色の部分とオレンジ色のテッセラの質感との対比に目を惹かれました。色彩的にはオレンジ色で統一されている窓の部分ですが、水平を基調としつつ曲線も取り入れたテッセラの配置から生まれるリズム感が目に心地よく、フラットな水色の「静」とオレンジ色のテッセラの「かそやかな動」の対比から音楽が聴こえてくるようで、いつまでも見つめていたくなりました。

平田恵利子さんの「ぶらぶら」は、人物をモチーフとしながらあえて頭部と足首をトリミングしてしまうという大胆な構図に「おおっ?！」と。背景が白地のままに残されているため、さまざまな大きさと色合いのテッセラによる奇妙な形態の身体表現が強調されて目に飛び込んできます。トルソに対して異様に細長い手足の造形も何やら不安感を掻き立てるようで、「この人たちはぶらぶらと散歩しているのではなく、どこにも行き場がなく（あるいは成仏できずに）彷徨っている亡霊なのではないか……」とさえ思ってしまった（勝手な想像あるいは妄想でしたら済みませぬ）。

形と色彩という点では、幾何学的な抽象形態を黒・白・赤・金を基調とする明確な色遣いで画面構成した小田いくこさんの「秩序と混沌と」にもはっとさせられました。これまでのキャリアでこのような作品を発表されたのは初めてとかがい、その実験精神は賞賛に値するのではないかと（ご本人にお目にかかったわけではありませんので、これも勝手ながら……）。

緻密なテッセラの扱いに関しては、福澤ヒロコさん「可能性」にも楽しませていただきました。いろいろな形と色の花を全体に散りばめつつ、黄色や緑、青、ピンク、紺色などで構成された地の部分の色遣いの構成と曲線を主体とする形の組み合わせの面白さ。細部の細部まで魅せてくれる作品だと思います。



小田いくこ 「秩序と混沌と」

そして最後に、大賞作品である若月弓枝さんの「朝露と稲穂」。稲穂を前面に背景に白い空というシンプルな画面構成ながら、背景の空にも稲穂にも微妙に色合いの異なるさまざまな形のテッセラが用いられていること、特に稲穂の部分には彩り豊かな緑だけでなく紫や黄色、オレンジ色なども使われていてテッセラの存在感に圧倒されました。



宮内淳吉個展 会場風景

2階で開催されていた宮内淳吉さんの展覧会も撤収作業中に飛び込み（失礼いたしました！）、宮内さんご自身とお話しする機会を持てたことも嬉しかったです。実は今回の私の海外出張の行き先はローマでした。古代ローマ帝国時代から現代まで連綿と受け継がれてきたモザイク芸術の歴史を改めて体験してきましたゆえ、モザイクの歴史にまつわる宮内さんのお話しは大変興味深かったです。2019年にあれほど不安を抱えて

講評会に参加していた私を、ここまで導いてくれたモザイク会議とモザイク芸術に感謝です。ありがとうございました。



宮内淳吉 「焚火」

名古屋モザイク 講評

相澤昭郎

名古屋モザイク工業(株)

名古屋モザイク賞 戸祭玲子さん 「森は呼吸する」



この一対のモザイク壁画は、近づいて見ると緑の深く豊かな色彩とラピスラズリの強いブルーや黄色のズマルトとの色の対比が目を引きます。また遠くから見るとその奥深い美しさを感じられる作品です。まるでモネの絵画から自然が溢れでてきたような感覚が広がりますが、絵画とは別の確かな実態感を持って表現されています。

森林の描写は、私たちにとってますます貴重な自然の尊さを伝えています。無数のモザイクのピースが小さな画面に凝縮されて、生命力を輝かせ、太陽の光を少しでも多く受けようとする姿勢は、まるで宇宙からの贈り物を受け取るようです。

私たちの目の前で自然と調和し、生命を守り、讃える力強いメッセージを伝えています。一方でぼんやりと何時までも見ていて見飽きない作品にもなっています。

大賞 若月弓枝さん 「朝霧と稲穂」

古典的な技法にある精密さや緻密さを飛び越えて、荒々しく、力強く生き生きと躍動する情景が際立った作品です。夏の早朝に稲穂が燃え上がるように伸びていく瞬間が、生命力豊かに表されています。また上部の白い部分は、朝もやの中に露が舞い降りる様子をはっきりとした形を持って張り込まれています。驚くべきことに、この荒々しさや大胆さは、稚拙さや未熟さと表裏一体関係にあ



るにも関わらず、全体的には統一感があり、まったく破綻していません。ひとえに作者のセンスと力量によるものである。ゴッホの描く田園風景のような情熱的なエネルギーが溢れるこの作品は、絵画と彫刻の境界を越える現代モザイク芸術の新たな可能性さえ示唆しています。

三席 平田恵利子さん 「ぶらぶら」



この作品には、思いつきそうで思いつかない魅力がたくさん詰まっています。人物のデッサンが非常にユニークで、手足の長さや太さが一様ではなく、その不均一さが目を引きます。それぞれの人型には、モザイクが鮮やかに象嵌されており、異なる色や大きさが、まるで人々の多様な個性を表現しているかのようです。

さらに、人型の不均衡なバランスは、人間の未熟さを象徴しているようで、お互いが不完全な存在であるけれども、手を繋ぎ、腕を組んで、仲良く一緒に「ぶらぶらと行こうや。」と 言われているようです。また、顔を省略することで、不気味さを排除し、むしろ風刺とウィットに富んだ独特の雰囲気醸し出しています。

佳作 左都さん 「hidden」

箱庭が繊細なモザイクアートで特徴づけられています。正面から見ると、庭の床部分には、ローマ風のモザイクが美しく敷き詰められており、その前面には、奥の空間を遮るように庭石が並んで配置されています。そして庭の裏に回ると、家を象ったモザイク装飾が、まさに“hidden”、隠されて

います。モザイクを箱庭の中で表現した手法は新鮮で、おとなの工作としても面白い。仮に、さらに精巧に緻密にモザイクを施していけば、新たな芸術の領域として広がる可能性を感じさせます。



モザイクタイルミュージアム 講評

服部 真歩

多治見市モザイクタイルミュージアム

モザイクタイルミュージアム賞 落合 香木 さん 「2月と共振」



モザイクと言っても作品のジャンルは幅広く、それぞれに魅力があるので1作品を選ぶのは大変難しかったです。今回は、作品の素材として主にタイルを使用したものであることと、タイルを使った表現の仕方に注目して、モザイクタイルミュージアム賞を決めさせていただきました。

素材選びの観点からだと、いくつか気になった作品がございます。まず、タイルと他の素材の組み合わせで特に面白かったのは菅原 真咲さん 《summer songs》でした。背景にタイルやガラスのほかに鏡を使用しており、作品の画面にアクセントが加わっていることが印象的でした。



美馬 佐安子さん 《The chirping of birds》は丸めた布を渦状の表面が見えるように配置している作品で、主題の通り、鳥のさえずりのようなあたたかさ、やわらかい雰囲気伝わってきました。素材の部分に注目してみると、作品の印象を大きく左右させる点で素材選びの重要性を改めて感じました。

美馬佐安子 「The chirping of birds」

そして、モザイクタイルミュージアム賞として選ばせていただいた落合 香木さん「2月と共振」は、タイルの形や目地を効果的に使い、人物の表情、服の形を表現している部分がとても魅力的だと思いました。また、彩度の低い世界の中に、差し色で赤が使われている所も目を惹くポイントだと思います。タイルで繊細なイラストレーションのような表現をされており、思わず一人一人の表情や動きをじっくり見つめたい部分がとても好ましく感じました。

様々な素材、技法や作風など幅広いジャンルの作品があり、モザイクの魅力を多視点から触れられたと思います。「モザイク展2023」に出品された皆様が今後も魅力的なモザイク作品を制作されるのを楽しみにしております。